



一貫コース通信

去る8月25日に12期生の「立志式」が行われた。立志式とは、奈良時代から平安時代にかけての時代、日本にあっては14歳（数え年で15歳）で古くから行われていた「元服」にあたる儀式である。本校では、中学3年生で人として「志」を立て、人生の指針と強い意志を表明し、前向きに自己の将来を設計しようとする力を培うために毎年行われているものである。私も1期生の時から、毎年この「立志式」に参加しているが、担任としての参加は「呼名」という大役もあり、やはり感慨深いものがある。特に生徒達一人ひとりの「立志の誓い」はこの三年間の成長を感じさせてくれるものであると同時に「必ず成功させる」という覚悟を私に持たせてくれるものでもある。

さきに述べた「覚悟」は教員としての「覚悟」であるが、これを書いているもう一つの「覚悟」というものを思い出した。それは親としての「覚悟」である。私は、約20年前に初めて親になった。

その時に感じた「覚悟」は、この短歌二首が物語っているとを感じる。

「しっかりと 飯を食わせて 陽にあてし ふとんにくるみて 寝かす仕合わせ」

「朝に見て 昼には呼びて 夜は触れ 確かめをらねば 子は消ゆるもの」

※この二首の短歌は歌人の河野裕子

ここには、生まれたばかりの小さな命のはかなさを感じ、それを手のひらで包むように育てていく果てしない繰り返しの日常のために、親は力を尽くしてその命を守っていかねばとする「覚悟」が現れている。おそらくこの「覚悟」は私だけでなく全ての親がわが子を抱きながら感じたことであり、この「覚悟」を抱いてわが子を愛し、慈しみ、守って育てていることであろう。

ゆえに、「立志式」を見た保護者はわが子の成長に喜び・これからの生活に激励を送り・わが子への思いを新たに感じたのではないだろうか。「立志式」後の「生活の記録」保護者欄にはわが子への大いなる期待と愛情あふれるコメントが多く書かれていた。

そして、私はこの思いの保護者から子供たちを預かっている。この「立志式」は教員としての思い・親の思い・保護者の思いというものを再認識できたそんな式でもあったように感じる。

生徒のみなさん、この二首を読んで「何をおおげさな」と親の愛情を思うかもしれません。しかし、「あなた」達の親はこのような気持ちで今「あなた」を育て上げているのです。

